

高橋 誠 著

『ブレインライティング 短時間で大量のアイデアを叩き出す「沈黙の発想会議」』

宗吉 秀樹

我々は日常的な課題から世界規模の問題まで、独創的な発想や解決策が必要とされている時代に生きている。しかしこれまで日本の教育では学力の向上に重点を置き、思考力、特に創造思考の育成や創造的な問題解決力の向上に重心が置かれることは比較的少なかった。そういった状況で本書は創造的発想技法の1つであるブレインライティング（以下 BW）の利用に焦点を当てている。著者はこれまで 40 年以上に渡り創造性開発・研究に携わってきた。第一線の研究者でありつつ、企業へのコンサルタント業務も行い、創造性の研究と創造性が活用される現場の両方に軸足を置いてきた。著者は現在、日本創造学会の会長も務めている。

本書に触れる前に、日本における創造性開発にまつわる歴史を簡単に振り返る。1938 年、米国広告代理店「BBDO」の創設者の 1 人アレックス・オズボーンはこれまでにない形のアイデア発想会議を考案した。のちにブレインストーミングと呼ばれる発想技法である。そしてこれが創造技法開発の幕開けとなった。1950 年代にはブレインストーミングが日本に輸入される。その後、1960 年代には日本で創造性開発がブームになり、日本の代表的な創造技法となる KJ 法や NM 法などが誕生した。この頃同時に、KJ 法や QC 運動に触発され多くの創造性関連書籍も出版されている。1979 年には「日本創造学会」が設立。この学会はその後、日本学術会議の登録団体になった。教育分野では 1989 年の新しい学習指導要領で、子供の創造力育成が重視された。また、90 年代に入ると経済界からも活発な提言が行われ、経済同友会は「共創」の概念を、経団連は創造的人材の重要性を唱えた。このように創造力育成の重要性が認識される今日、日本には主要な創造技法が 80 以上存在すると言われている。BW はそれらの発想技法の中の 1 つである。

BW はドイツのホリゲル(Holiger)が 1968 年に開発した。彼はドイツの形態分析技法の専門家であった。この技法を著者が始めて日本に持ち込んだ。BW はブレインストーミングを発展させたものである。ブレインストーミングは会議のメンバーが口頭で次々にアイデアを発表していく。一方、BW では、円卓状に座ったメンバー 1 人ひとりが「ブレインライティング・シート」と呼ばれるシートにアイデアを書き込み、シートを隣に座っているメンバーに渡して、新しく渡されたシートに順番にアイデアを記入しながら、集団発想を進めていく。その間メンバー達は沈黙したまま発想を行う。

著者はBWの特徴を3点あげている。第一に、日本人は人前で意見を言うことに慣れていないので、この発想技法は日本人に最適だという。第二に、BWでは短時間で大量のアイデアを出すことができるという。「6人で標準的なやり方をしても20分もあれば108アイデアを出せますし、人数ややり方によってはわずか1時間で、1000以上のアイデアを出すことも可能」だという。第三に、BWは1人でも1000人でも、一箇所に集まってもネット上でも実施できるという。本書の中でインターネットで行う手法として「eブレインライティング」が紹介されている。

本書の構成は3つに分かれている。第1部でBW自体について述べられ、第2部・第3部ではBWとその他の創造技法を同時に使う方法が解説されている。第1部は3章から構成されている。第1章ではBWがどのような技法かについて詳説。ここでは同技法の10のメリットが紹介された後、ブレインライティングを使ったアイデア発想会議の実施法について丁寧な説明がなされている。この章を読み終えるだけでも、この発想技法を利用することができるようになるだろう。第2章では同技法を1人で行う場合から、数百人規模の大人数で行う際の実施法が記されている。300人の大学生を相手に実施した、BWによる発想会議などが事例として紹介されている。また同章では、メールを利用した「eブレインライティング」や衛星設備などを使った「遠隔ブレインライティング」など、コミュニケーションツールとの融合を図ったBWの応用法も紹介されている。第3章では、付箋紙を利用した「カード・ブレインライティング」、考えるテーマをあらかじめ抽出して行う「キーワード・ブレインライティング」について解説がなされている。

第2部は3章からなる。BWをより効果的に行うための3つの発想法を中心に解説。著者は、人は発想する際、無意識のうちにそれらの発想法を使っていると述べ、それらを意識的に利用することでその効果を何倍にもすることができるという。本書では自由連想法、強制連想法、類比連想法の3つが紹介されている。第4章では自由連想法の解説と、それを利用した2つの発想技法およびブレインライティングへの応用法が述べられている。第5章では強制連想法と、それに基づく発想技法が2つ紹介され、第6章では類比発想法と3つの発想技法が示されている。

BWでは数百ものアイデアが出ることはまれではない。その場合、最終的に実行するアイデアをどのようにして選ぶのだろうか。この疑問に答えるのが本書の第3部で、3章から構成されている。初めの第7章では、冒頭、創造的問題解決手法が紹介されている。その手法は2ステージ・6ステップからなる。著者は各ステップを詳しく解説した後、それぞれのステップでどのようにBWを活用するかを説明する。さらに、同章では3つのアイデア収束法、「空間型法」、「系列型法」、「評価法」が解説されている。それらは上記3つの発想法と対になるものであり、アイデアをまとめる際の思考を分析・整理したものであるという。つづく第8章では「空間型法」に関して代表的な3技法を、第9章では「系列型法」に基づく3技法が紹介され、BWで出された数多くの情報やアイデアを評価・整理する手法が解説されている。

本書の特徴をまとめると次の3点になるだろう。それらは実用的、教育的、独創的である。第一に、実用的な本書はもともとBWをビジネスマン向けに書いたものであるため、彼らがすぐに実践

できるよう工夫がなされている。例えば、各発想技法と収束技法を BW に応用する頁では、その実施手順が必要十分に解説されている。キーワードブレインライティングの進め方を扱った項では、事前準備として「1. テーマを決定する」「2. リーダーとメンバーを選ぶ」「3. 机は円卓式にする」となっている。そしてそれぞれに数行の解説がなされている。この様に実施手順が明示されているので、読者はそれぞれの技法を明日からでも行うことが可能だ。加えて、日常生活で活用できる様々なアイデアもちりばめられている。著者が考案した情報の記録法や情報活用の 3 原則、系列型法の技法を応用した論文作成術・プレゼンテーション計画などは大学生やビジネスマンが知っておく価値のある項目だろう。

第二に、本書の教育的な側面は創造性研究に関する歴史や理論などが紹介されている点である。例えば、第 2 章では、アメリカ心理学学会の会長を務めたこともある J.P.ギルフォード博士が提唱した頭脳モデルが紹介されている。これは人間の知能を理論化したモデルで、著者が本書で説明している「発散思考」と「収束思考」を創造性研究にもたらすことになった非常に有名な理論である。また、第 4 章ではブレインストーミングが生まれたいきさつなどが紹介され、第 7 章では創造的に問題を解決する手法やギルフォード博士が開発した創造性テストに関する記述もなされている。

第三に、本書は独創的である。これまで創造技法に関する書籍は数多く出版されてきた。しかし BW と他の創造技法(特に発想技法)を組み合わせた利用法をこれだけ収録した書物はないだろう。それらの中で特に注目したいのは、BW と類比発想法の組み合わせである。認知意味論においては、我々人間の思考はメタファー（隠喩）によって大部分が形成されているといわれている。多くの事柄はメタファーを介して理解され、メタファーを使って話し手のメッセージが伝えられる。たとえば「時は金なり」という言葉があるが、これは時間という抽象的な概念を金銭という具体的なものになぞらえて理解しているのだ。この表現で、時間は（金銭同様）貴重なものであるという概念を表している。メタファーがこのように思考に深く根ざしているのなら、それを利用する類比発想法と BW は必然的に融合されるべきである。そして本書でもこの点が解説されていた。類比発想法を使う 3 つの発想技法をどう BW に応用するか。それらのことが 20 ページに渡って詳説されている。これらを読み進めることで、読者は類比思考の仕組みと機能を知り、類比思考に基づいた発想技法にはどういったものがあるのか、そしてそれらをどう BW 作業に活かすことができるのかを理解するだろう。

以上本書の特徴などを述べてきたが、改善できる箇所がないわけではない。例えば、BW とブレインストーミングの発想効果などの比較研究などが紹介されていれば、さらに BW 利用の説得力が高まっていただろう。また、KJ 法が学校現場で利用されたことがあるように、学校現場の総合学習などにおいて BW が利用されることも増えてくるのではないだろうか。すると、問題解決における BW の利用法において、読者の一層の理解を促すにはどうすればよいか、という問いも考慮されてよいだろう。現実の創造的問題解決場面において、BW を利用した発想会議の生の記録を収録掲載することも一案かもしれない。いずれにせよ、今後は、BW の教育的効果の研究にも期待したい。

以上のように、本書はBWという発想技法を実用的に紹介したものである。しかし、著者の長年の創造性研究の知見が本書をそれだけに留めておくことはなかった。本書は創造性研究で主要な領域を占める「創造技法」について概説し、創造性研究の歴史やこの分野における代表的な理論なども扱っている。本書は、BWの説明書でありつつ、創造性研究への入門書でもある。多くの方が本書を手に取り、BWや創造性育成に関心を持つことを切に望みたい。

(東洋経済新報社刊、2007年10月発行、B6版、219頁、本体価格1,500円)